

もうすぐ春がやってきます！  
季節の変わり目、  
体調管理に気を付けましょう！



## 「7人の子ども」

福岡県博多湾にかかる橋の上で、家族5人を乗せた車が猛スピードの車に追突され、橋の欄干（らんかん）を突き破って、14メートル下の海へ転落しました。夜の暗い海に何度も潜りながらも、わが子を一人も救えなかった母親は、「なぜ自分は助かったのだろう」という重い罪悪感を抱え、PTSDによる深刻な障害に苦しみながら生きてきました。

事故から19年が経った昨夏、母親は初めて事故について講演を行いました。会場は私立博多高校の体育館。1,200人の高校生に語りかけた講演の一部を紹介します。

海に沈んだ車内を泳ぎながら子どもを探しました。真っ暗で何も見えない中、最初に1歳の長女と3歳の二男を助け出しました。「絶対に生きて帰る。絶対に家に帰る」と強く思いながら救いましたが、4歳の長男だけは、2度潜っても見つかりませんでした。

水面に上がると、長女と二男を抱えたまま、夫が海中に沈んでいました。このとき私は、恐ろしい決断を迫られました。長男をもう一度助けに行きたい。しかし、その間に3人が命を落とすかもしれない。「3人を諦めるのか。それとも3人を助け、長男を諦めるのか。」それほど時間がありませんでした。私は3人を助けることを選びました。それは、絃彬（ひろあき・長男）が助からないということの意味していました。ありったけの声で、「ひろー！」と叫んだあと、私は長女と二男の方へ向かいました。

しかし二男は、私の肩に夕ご飯を吐きながら、私の胸の中で息を引き取りました。

その後、別々の救急車で運ばれましたが、2人とも助かりませんでした。絶望の中、亡くなった二男と長女とともに家に戻りました。長女はまだ、「ママ」って言ったことがなく、私は娘の言葉になった声を一度も聞くことができませんでした。

そして真夜中、長男の遺体が車内から見つかったという連絡が入りました。

母親は事故の後、4人の子どもを授かりました。一番上の二女は高校2年生。三男（中3）、三女（中1）、四男（小3）のきょうだいたちが、深い悲しみに苦しむ母を支え、19年という長い時間をともに歩んできました。

「生かされた意味」の答えにたどり着いた母親は、講演の翌月、4人の子どもたちと初めて事故現場を訪れました。その10日後に、私はこの家族と少し長い時間を過ごす機会を得ました。母を一人にはさせない。どんなときも母のそばから離れようとしない、固く結ばれた絆に胸を打たれました。

母親の名前—大上かおりさん—で検索すると、多くの記事が閲覧できます。母親を支える子どもたちの記事が一気に広がった結果、かつて散見された無神経な書き込みや、被害者である母親の心を傷つけるSNS投稿は姿を消し、わずか半年で目にするものがなくなりました。

苦しみの中でも前へ進もうとする母と子どもたちの姿は、ネット社会の影響を受けて生きる私たちに、一縷（いちる）の望みをもたらしています。

生涯学習推進アドバイザー 小田島 数幸（元、砂川高等学校長）